

# 女性高等教育とエンパワーメントの可能性

## —同志社女子大学卒業生にみる女性像—

三宅 えり子

### I. はじめに

本稿の目的は、アンケート調査結果に基づいて同志社女子大学卒業生の女性像を描き出し、本学が提供してきた教育の質を問うことにある。またその考察をもとに全国的には縮小傾向にある女子大学の存在意義について論じることで、教育とジェンダーの問題と向き合う第一段階としたい。

アンケート調査集計結果と概要については、同志社女子大学総合文化研究所紀要（三宅 2003）に研究資料として収録されているが、本稿では、前回の集計項目に年代別または就業タイプ別を加えることにより、多くの項目において年代別と就業タイプの集計比較に基づいた分析を行っている。

なお、アンケート調査は、同志社女子大学研究プロジェクト「教育とジェンダー」の一環として2002年4月に500人の卒業生を対象に実施し、有効回収率182人のデータを Statistical Package for Social Science (SPSS) で統計処理を行ったものである。62の質問項目は、大学生活、建学の精神と教育理念、ジェンダー意識、就業状況、個人データの領域で構成されている。これらの領域のうち女性の就業状況に関しては、日本労働研究機構や各白書で本格的な統計が出ているため今回の調査ではあえて内容的に制限したものになっている。

## Ⅱ. 女性高等教育の背景

### Ⅱ. A. 同志社女子大学発展経過の概略

同志社女子大学は、1876（明治9）年、京都市内において、同志社女子部（翌年、同志社女子校と改称）としてスタートした。その前年に同志社英学校（現、同志社大学）を開校した創立者新島襄は、女性の教育目標と社会的ニーズについて、「女権を拡張することにもふ一層の力を尽されたし」「女学校生徒に人権を重んずべき事と慵慨心を起さしむるの一事是なり」「一体婦人は社界改良や社交の事には男子よりも勢力あるものなり」と述べている。（宮澤：96）これは女性の潜在能力とその開発の必要性を広く認めたものであるが、当時、封建的で男尊女卑が根強く残る社会的風潮の中では、現代に通じる女性教育の先駆けとなるものであった。キリスト教主義を建学の精神にもち、アメリカの女性宣教師たちの献身的な支援を受けた創設当時のリベラルな学風は、いわゆる「勸業授産」ではなく「才芸知識」を目的とする点で他の女子教育機関とは一線をなしていた。カリキュラム内容は、リベラル・アーツ教育の性格をもち理系科目、音楽、体操を含む広い分野にわたるもので全人教育を意図していた。

1912（明治45）年、専門学校令により英文科と家政科の専門学部を設置し、1949（昭和24）年、戦後の教育改革において、英文学、音楽、食物の三専攻からなる女子大学へと昇格した。大学設置の目的は、本学建学の精神と教育理念が凝縮されたもので、次の「同志社女子大学許可申請書」の冒頭文によく表されている。「本大学は教育基本法及び学校教育法に基き学芸の大学として学術を教授研究すると共に明確に思考し有効に思想を発表し諸種の価値を判断識別する能力を育成しあわせて基督教の理想に遵ひ円満な人格を涵養すると共に国際的民主主義社会に於て建設的に且つ責任をもって生活し得る女性の養成を目的とする。」（同志社女子大学125年：152）その後、時代の変化に応じて様々な改組改変を重ね、現在3学部8学科（2004年度）からなる5000人規模の女子大学となっている。

明治9年の創設以来、同志社女子大学は、女性教育の主要な一端を担ってきたことを自負しているが、本稿にあるような形で卒業生を対象にアンケート調査を実施したのは今回が初めてのことである。アンケート調査の対象はプロジェクトの規模上500人に制限せざるを得なかったが、1955年度から2001年度までの卒業生のうち、英語英文学科から84人、日本語日本文学科から14人、音楽学科から9人、人間生活学科から42人、食物栄養科学科から32人の回答を得た。ただし、1949年大学設置当時からの懸案でもあり、他の学部とは性格を異にする現代社会学部（2000年開設）と2002年開設の情報メディア学科の卒業生は調査対象に含まれていない。

## II. B. 女性と高等教育

日本の大学689校のうち90校の四年制女子大学が存在し、その割合は先進国中最も高い。最近の学生の共学志向と少子化の流れの中で女子大学の存続が危ぶまれる中、女子大学の存在意義が問われている。そこで、女子大学で教育に携るものとして、その存在意義を再考しておく必要があると思われる。

青木生子によると、戦後教育改革の一環として従来の特設学校令による女子大学校が新制大学として念願の「女子大学」となったが、男女共学大学制も同時に実施されたため女子大学は最高学府としての積極的存在意義が薄れる運命に遭遇した。（青木 1998：11）戦前までの男女別学教育制度は女性の社会的地位の低さを反映し、同時にそれを再生産するものに他ならなかった。戦後の女子大学発足の原点は婦人解放を目指した点であるが、同志社女子大学は1876年の設立当初からその意識を建学の精神として持っていた。しかし、戦後の女子大学急増の中で、伝統的な良妻賢母的な女子教育に対する社会のニーズに迎合し、別学を通じて男女平等を目指すという本来の目標を見失いかけたことはなかっただろうか。日本の女子大学の見かけの存在について、いわゆる教養と国際性を強調する理念を掲げてはいるが日本人女性の女らしさを育成するものにすぎないという McVeigh（1997；2002）の厳しい批判に対して、私たちはどのように反論できるのであろうか。

女性の大学進学率は年々高まり、2000年度は48.7%（そのうち17.2%は短大進学者）で、男性の47.5%を上回っている。（内閣府 2001：91）この高い進学率は一見男女平等の社会変化の波を象徴するかのように見えるが、学問専攻分野の男女間の片寄りと労働市場の職業分離に目を向けると、現在女性のおかれた状況は大きな矛盾をはらんでいる。たとえば、男性の専攻分野は工学、社会学系の学科に集中しているのに対し、女性の専攻分野は人文、家政、教育系の学科に集中している。（井上・江原 1999：138-139）職業進出分野においては科学、法律、経済に関する職種で男性が過半数を占めているのに対し、女性は教育や社会福祉など従来から女性職とされる分野に偏っている。（Ibid.：104）男女間の平均賃金格差は100：65（内閣府 2003：24）と開いたままであり、企業における女性管理職は8.2%で（井上・江原 1999：115）先進国中最も低い。

女性が、伝統的な学問分野を専攻し、高い大学進学率が労働市場に反映されにくい要因として、女性自らが伝統的な女性性と役割分担を受け入れる点が指摘される。女性が女性役割を受容する理由として3つの仮説が存在する。1. 女性は伝統的な女性役割を担うべきだというイデオロギーを注入された結果女性役割を受容するという虚偽意識仮説、2. 女性役割を担うことが自分にとって有利かどうかを合理的に判断した結果女性役割を受容するという合理的選択仮説、3. 女性役割を担うことによって実質的な満足感や幸福感を得るようなパーソナリティーが社会化過程の中で形成されその結果女性役割を受容するという適合化仮説の3つである。（木村 2000：219-228）日本の多くの女性が高学歴にも関わらず、家事と子育ての主要な担い手となるために就労曲線のM字型カーブの底が上昇しにくい理由は、上記3つの仮説の複合的要因によると思われる。

今回の分析においては、合理的選択仮説がより説得力をもつ。すなわち女性が専業主婦の立場を他の就業選択と同様に意図的な選択肢の1つととらえてきたという解釈である。日本の専業主婦、とりわけ母親は社会的に一定の地位を確保してきた。この状況は、性差に関わらず職業と収入が社会的に高く評価される先進国とは異なる。また、個人主義の傾向が強く核家族を単位とする欧米

諸国に比べて、集団主義の傾向が強く三世代同居所帯の多い日本では、世代間の協力・支援関係が強い。そのような状況の中で女性が就業選択をせまられた場合、プラス・マイナスを勘案した上で専業主婦でいる方がプラスであると考えらるなら、専業主婦の割合が高くなるはずである。Bradford & Cohen (1991) は組織内の目標達成、影響力行使の過程において二者の間で交換される行為とその受容関係を分析しているが、その論法を応用するなら、妻は家事労働と子育ての労力全般を“exchange currency”（「交換貨幣」）として配偶者に提供するかわりに専業主婦としての社会的地位と境遇を享受するのである。最近の非婚化、晩婚化、少子化傾向の要因に関しては様々な議論があるが、従来の専業主婦と子育ての選択肢が「割に合わない」と考える女性が増加していることの表れでもある。

前述の矛盾を抱えながらも、戦後から現在までの長期的スパンで見ると、各種統計が示す通り女性の進学率と就業率は上昇し、女性の社会的地位はその速度はともかく着実に向上している。ここで議論を女性と高等教育にもどすなら、戦後、女子大学は女性の地位向上にどのように貢献してきたのであろうか。戦後女子大学に昇格した戦前からの女子教育機関の優れた教育的営みと努力実践に関しては、個々に様々な記録が残されている。しかし、残念ながら高等教育が女性に与えた影響と効果についての実証的な研究は日本では蓄積されていない。

女性解放運動の厳しい歴史を経てきたアメリカでは、女子大学の存続をかけて、女子大学の教育効果及びその存在価値について多数の調査研究が行われてきた。その主要なもの1つに Tidball ら (1999) による *Taking Women Seriously: Lessons and Legacies for Educating the Majority* がある。その中で、教育効果を上げ存続に成功しているアメリカの女子大学には次のような7つの特徴が見られるという。1. 大学の使命を表わす教育理念を教職員が熟知し、日々その実践に努めていること。2. 個々の女子学生の能力と可能性を信頼し、それを言動によって女子学生に伝えること。3. 学内において能力開発するための支援環境を提供していること。4. 役割モデルとしての教職員が各職階に

において男女バランスよく配属されていること。5. 各学生が主役になることができ、動機づけと意欲ある学生が他にも多く学内に存在すること。6. 授業だけでなく課外活動においてリーダーシップ発揮の機会を多く提供していること。7. 学生の意識喚起のために女性問題や人権問題に関する講座がカリキュラムに組み込まれていること。(Tidball et al. 1999: 96-101) これらの教育環境は日本の女子大学においても示唆に富むものと思われ、1番目の大学の使命と教育理念については当アンケート調査の問10～問12で、4番目の役割モデルについては問5, 問6で、7番目の女性学関連講座について問3, 問4で記述式で印象に残っている授業と今後の設置を望む授業科目を問う形で反映されている。

### Ⅲ. データ集計結果の分析

#### Ⅲ. A. 1. 大学生活について

大学の卒業証書さえあれば、就職先や良縁、またはその両方を手に入れることが比較的容易であった高度経済成長期を経て経済がゆきづまり低迷期をむかえる中、就業者の資質が高度に選別される一方、価値観が多様化し厳しい経済的現実を受け入れなければならない時代である。そのような中で、本学卒業生はどのような大学生活を送ってきたのであろうか。回答者の概要であるが、合計182人のうち年代別内訳は20代が38人、30代が40人、40代が44人、50代が35人、60代が25人である。

まず、学生生活を通じて得るものが多く有意義だったことは、「授業」と「交友関係」がそれぞれ116人、115人とほぼ同数で上位を占めている。これは改めて大学の主要活動である授業の教育的重要性と、他の在学生の影響力を指摘するものである。続いて、クラブ・同好会(80人)、卒論ゼミ(57人)、アルバイト(42人)、寮生活(39人)、チャペルアワー(32人)の順に多い。(図1-a) この表を20代から60代までの年代別で見た場合、明らかに各年代と相関関係にあると思われるものは、寮生活とクラブ・同好会の項目で、若年層になるにつれて減少している。他の年代と比較して20代にみられる顕著な特徴は、海外留

学，リトリートの回答率が高く，チャペルアワーの回答率が低いことである。30代はアルバイトから得るものが多かったとする人が多く，40代では，全体平均の上位2項目と同じく授業と交友関係において高い割合を示している。50代では，チャペルアワー，大学祭，サマーキャンプが高くなっており，60代は，先に述べた寮生活とクラブ・同好会および，卒論ゼミの回答率が高い。(図1-a)

大学時代を通じて身についたことに関しては，全体として教養(99人)，人格形成(80人)，専門知識(59人)，思考力(49人)，対人関係能力(49人)，自信(44人)，社交性(42人)となっている。(図2-a)この順位は，図1-aの順位にはほぼ次のように呼応している。授業・交友関係—教養，クラブ・同好会—人格形成，卒論ゼミ—専門知識・思考力，アルバイト—対人関係能力等の関係は，「得るものが多く有意義だったこと」と，そこから「身についた」ことが呼応したものと同一ような順位になったと考えられ，回答傾向にある程度の一貫性が見られる。項目の中で，情報収集能力とコンピュータスキルは，若い年代にいくほど回答率が高く，この傾向は，高度情報化時代の発達に対応したものである。(図2-a)

次に上記の2つの質問項目を就業タイプ別として継続(44人，24.2%)，再就職(64人35.1%)，中断(47人25.8%)，無就業(26人，14.3%)のグループごとに集計すると，それぞれのグループの傾向が明らかになる。

就業継続グループはアルバイトを通じて有意義な経験をしており，高い教養だけでなく，コンピュータスキル，語学力，情報収集能力を身につけた実学志向のグループといえる。しかし，対人関係能力と自信が身についたとする傾向が低い点では，他のグループに比べて際立っている。(図1-b，図2-b)

再就職グループにとっては，クラブ・同好会と卒論ゼミが特に有意義であり，人格形成，自信，社交性が身についたという自信派が多く見受けられる。このグループは，日本の労働市場で就業中断後困難な再就業を果たしたグループであり，アンケート調査の回答傾向(特に問1，2，7～10)から，高い価値観形成能力を獲得していると思われる。

中断グループは交友関係、寮生活、大学祭で有意義な経験をしており、思考力、集団活動実践能力が身についたとする人間関係重視の特徴が見られる。

無就業グループにとって有意義であったものは、寮生活、チャペルアワー、リトリートであり、特に対人関係能力と問題解決能力が身についたとする精神面重視の傾向が見られる。さらに、このグループの他の特徴として、コンピュータースキル、語学力、情報収集能力、思考力、教養が身についたとする割合が他のグループに比較すると著しく低い。(図1-b, 図2-b)

今回の調査結果において、大学生活が教養を高め、人格形成に有益な効果があったという回答率の高さは、McVeigh (1997; 2002) の女子大学が見かけの存在にすぎないという説を否定する可能性を持っている。

在学中の学生にとって、役割モデルの存在はTidballら(1999)も指摘するように、卒業後の進路選択に際しての影響力を持つ。1998年度、国立大学の女性教員の割合は全国平均6.6% (国立大学協会 2000: 27) で、今後さらに増やそうという目標を掲げており、日本政府は「指導的地位にある女性」の割合を2020年までに30%に引き上げるという目標を発表している。同志社女子大学の2003年度の女性教員の割合は、専任教員125人中42人、33.6%で、1949年の大学設置時期には女性教員が主要なポストを占め、以来30%前後を保持している。アンケート調査の「大学時代、生き方を考える上でお手本」となった教員と先輩の存在に関して、年代別集計の顕著な特徴は、年代が上がるにつれて、女性教員の割合が増える点である。(図3-a) また、60才代のグループでは、72.0%が他大学の卒業生が役割モデルとなっている。(図4-a)

就業別に見た場合、まず再就職グループの特徴は、最も多く教員の役割モデルがいたグループで、女性教員42.2%、男性教員23.4%である。(図3-b) また、43.5%が、本学在學生に役割モデルを見い出していた。(図4-b) このグループは女子大学存続の必要性を最も高く認めており、彼女達にとって役割モデルとしての教員が重要な役割を果たしたと想像できる。

次いで、継続グループと中断グループに共通している点は、それぞれ54.5%、55.3%の人が本学には役割モデルの教員を見い出さず、61.4%、61.7%の人が他



大学卒業生に役割モデルを見い出している点である。特に継続グループは、問2でアルバイトの経験から得るものが多かったとするグループでもあり、どちらかという学内より学外に目を向けていた学生群で、将来女子大学は必要でないとする人が31.8%と他のグループより高い。

図3、図4の設問は「生き方を考える上で」と抽象的な表現を用い、「キャリアを考える上で」という尋ね方をしていないために、回答者により設問の解釈の仕方は異なると思われるが、無就業グループは、女性教員と本学の学生に役割モデルを見い出した人が多く、女子大学が必要でないと考える人は最も少ないグループである。

### Ⅲ. A. 2. 建学の精神と教育理念について

同志社女子大学が1876年の創設以来127年以上にわたって存続している理由は、その優れた建学の精神と教育理念によるところが大きい。具体的には図5、図6に記載されているが、女性の人格と自立を尊重し、その能力を最大限に伸ばし、国際的な視野で社会に貢献できる女性を育てるというのはまさしくエンパワーメントの概念に通じるものである。近年フェミニズム運動の高まりの中で女性のエンパワーメントが課題となっている。エンパワーメントとは女性が個人の内面と社会制度の両方において力を得て行く過程であり、「女性が自分自身の生活を決定し支配する権利と能力をもち、社会的・経済的・政治的な政策決定の過程に十分に関わることを意味する。(国立婦人教育会館 1999: 6)そして、本学の主体性を持つ女性の根底には「良心」としての愛があり、国際性を備えている点が同志社女子大学精神のアイデンティティーといえるのではないだろうか。新入生にとって建学の精神や教育理念は一種の抽象的概念にすぎず、即座にその深みを理解することは困難である。建学の精神と教育理念を学生を通じて具現するためには、教育者が自らの言葉として教育理念を持ち、日々実践することによって教育効果が上がるのであろう。

図5、図6は卒業生に建学の精神と教育理念をどの程度覚えているかを尋ねたものである。結果的には大学案内のパンフレット等に記載されている順に記

憶率が高い。回答率を就業グループ別に比較した場合、継続グループは「専門分野にかたよらず幅広い分野の学問を修め、豊かな教養と幅広い視野を身につける」という教育理念の回答率が他のグループよりも高い。ただし、建学の精神も教育理念もほとんど覚えていない率が最も多いのもこのグループである。この記憶率に関しては、「大学生活について」の部分で述べたように、学外にも広く価値観を求めていたとも解釈できる。再就職グループは、「女性の人格を尊重し、自立した人間として豊かな人生を過ごせる教養を身につける」という建学の精神の記憶率の高さと全般的な記憶率の高さにおいて、他のグループより顕著である。継続グループも再就業グループも教育理念を学生間、教職員間に徹底させる必要性を強く認めている。回答選択肢の教育理念の徹底が「とても必要」と「やや必要」を合計した数値は、継続グループも再就業グループも80%代であるのに対して、中断グループと無就職グループは60%代と大幅に下回っている。(図8) 中断グループは、「国際的な視点・考え方を育む」という教育理念の記憶率が他のグループに比べて著しく低く、建学精神と教育理念徹底の必要性に関しては、「何ともいえない」という立場の割合が他のグループより高い。無就業グループは、建学の精神と教育理念のすべての項目において、全体平均に近い数値を示している。(図5, 図6)

### Ⅲ. A. 3. 女子大学存続の必要性について

大学生活全般の満足度は、全体の73.0%が「たいへん満足した」あるいは「やや満足した」と答えており、最も最近の卒業生である20代の満足度が年代別では高いことは、大学側にとって心強い。しかし、女子大学存続の必要性については全体の半数近くの46.2%が「どちらとも言えない」と答え態度を決めかねている。(図9, 図10-a) 年代別では、40歳代(11.4%+31.8%=43.2%)、就業タイプ別では再就業グループ(18.8%+28.1%=46.9%)が最も強く女子大学存続の必要性を感じている。(図10-a, 図10-b) 40歳代は、卒業して社会人になる時期と女性運動が社会的に高まり始める時期が一致したグループであり、再就業グループは就業上の男女格差の現実を体験している度合いが高い。女子

大学存続について積極的なコメントをした62人のうち30人の内容は、建学の精神と教育理念の表現を用いるなら、女性の人格を尊重し、個性や能力を伸ばす環境が提供できるという点に集約できる。女子大学が必要でないとする人のコメントの中からは説得力のあるものが見られない。

#### Ⅲ. A. 4. 卒業生が望む女性像

「同志社女子大はどのような学生を育てることが求められているか」という問に対して、次のようなものが主な回答であった。「深い専門知識を持った人材の育成」、「グローバルな視野を持ち国際社会に通用する人材」、「豊かな教養を身につけ慈愛に満ち社会に貢献できる人材」、「社会に貢献できる積極性と柔軟性をもった人材」、「女性の地位を向上させるような考え方をもつ人材」、「リーダーシップを発揮できる人材」、「夢と希望を持って何かの目的に向かって打ち込める学生」、「自主・自立の精神」、「自分の頭で考えて判断する力」、「世界に目を向け好奇心と感動を持ち続けられる人間」などである。

これらの表現を統合すると、「主体性のある自立した人間として深い専門知識と豊かな教養を持ち、グローバルな視野で良心に基づいて国際社会（日本社会を含む）に貢献できる人材」ということになる。卒業生が描く女性の理想像は、表現こそ異なるが建学の精神と教育理念の概念を統合したものとまさに合致する。ここで、建学の精神と教育理念の時代を越えた普遍的価値とそれらが多くの卒業生の意識下に様々な形で根付いていることを改めて認識させられる思いである。

#### Ⅲ. B. 1. 就業状況

182人の回答者のうち、24.2%（44人）が、大学卒業後現在まで継続して就業しており、35.2%（64人）が大学卒業後就業して中断後再就職、25.8%（47人、うち1人未回答）が就業中断後再就職しておらず、14.3%（26人）は大学卒業後就業していない。就業継続グループと再就業グループを合わせると、全体の59.3%が現在何らかの形で就業しており、これを年齢層別のグラフにすると図

11のようになる。このグラフは一般的な女性の年齢層別労働力率の算出方法とは異なるが、日本人女性特有のM字型曲線ではなく、30～34才と40～44才の就労率が落ち込んだ形となっている。これは女性のたどるライフコースが複雑、多岐にわたることを示唆するものであり、回答者の就労率59.3%は2003年度の日本女性の労働力率48.5%（厚生労働省2003）を10.0ポイント以上上回っている。

就業経験者全体の勤務先の産業分野別上位3位は、教育サービス（24.2%）、卸売・小売業・飲食業（16.5%）、公務（11.0%）で、勤務部門は、教員（19.8%）、営業・販売（13.7%）、総務・広報（8.8%）となっており（図12、図13）本学卒業生の主な社会進出部門は、今回の集計では教育と営業・販売である。就業タイプ別に見た場合、就業継続グループは、産業分野では、公務、教育サービス、卸売・小売業・飲食業、製造業に多く、所属部門では、教員、営業・販売、研究・開発に多い。（図12、図13）図13の勤務部門で「その他」の回答率が高いのは、図表のカテゴリーのように機械的に分類できない点が考えられる。

就労継続理由としては、経済的な理由に加えて、仕事のやりがい、社会とのかかわりが持てること、自分の能力や資格を活かすことなどをあげている。（図14）また仕事を続けてこられた要因として、「女性が働き続けることに対して偏見を持たない職場であること」、「仕事は仕事と割り切って、あまり力を入れ過ぎないこと」、「通勤時間が短いこと」、「男女かかわりなく、能力と貢献度で正しく評価される職場であること」、「自分の残業や休日出勤が少ないこと」等、職場のジェンダー・フリーな要因と物理的に働きやすい環境を指摘している。（図15）

大学卒業後、就業を中断した112人のうち、約半数の54人が結婚を機に仕事を中断または退職し、その理由として、「結婚したら女性はやめなければいけないという職場の雰囲気だった」ためという人は2人だけで、むしろ「あまり何も考えず、結婚したらやめるものと思ってやめた」（13人）と、「夫の勤務地が遠かった」（14人）という回答が多い。（図16）これらの就業を中断した112人のう

ち、半数以上の64人が自分の能力や資格を活かし、社会とのかかわりと経済力を手に入れる必要から再就職している。(図17) そのうちの大多数(40人, 62.5%)は時間的に融通のきくパートタイムまたはアルバイトの形で就業し、12名(18.8%)がフルタイムで再就職している。就業中断後、再就職しなかったグループ同様、大学卒業後就職しなかったグループは、結婚が主な理由である。(参考資料 問26)

### Ⅲ. B. 2. 就業タイプ別生活像

アンケート調査項目のうち、子どもの数(図18)、親との同居率(図19)、親からの協力・支援内容(図20)、人生経験(図21)の回答傾向から、就業タイプ別にそれぞれ次のような生活像を描くことができる。

まず無就業グループについてみると、平均的に子どもは2人で、人生上の問題をかかえている人は他の3グループより7.4ポイント以上少なく、経済上の問題をあげた人は皆無である。親と同居している人が多く(40.9%)、食料品、物品を始めとして、不動産取得、教育費、子どもの世話など、親からの協力や支援を多く受け恵まれた環境にある人が多い。ただし、親との同居率が高いだけに、舅、姑との関係で悩む人が多い(16.3%)

無就業グループと対称的な継続グループについてみると、子どもがいない人が多い。子どもの数が0人と答えた人は27.3%で、設問の仕方から未回答43.2%の大部分も子どもの数が0と推測できる。自分または家族の就職に際して、親から協力や支援を受けた人の割合が7.8%と最も高い。このことから、就業継続グループにとっては就職の際の親の理解と支援が重要な要素となっていたことがうかがえる。これは、継続グループの21.1%が今の就職が直接大学の就職支援によるものではないと回答していることにも関係すると考えられる。

ところが、この継続グループは、経済的な問題や自分や家族の健康上の問題をかかえる人が多く(20.8%)、仕事と家庭の両立に悩みながら、また健康を犠牲にして就労を続けている状況が浮かび上がってくる。またセクハラや自分自身の異性関係について低い割合ではあるが、他のグループより多くあげられて

いる。また父母との関係で問題を感じている人は、他のグループの倍近くおり、親との同居率が無就業グループについて高いことを考えあわせると（40.0%）、配偶者の親ではなく自分の親と同居している女性が多いと推測できる。

再就業グループは、親からの協力・支援内容、人生経験のそれぞれにおいて1項目だけ他のグループより突出している。それは離婚率が最も高く、自分または子どもの教育費で親から支援を受けた率が最も高い点である。このことから、離婚後の経済的自立の必要性が再就業率を引き上げていると解釈できる。また、自己の再教育のための教育費であったか子どもの教育費かということ考えた場合、問25(1)の再就業理由、問25(2)の就業形態、問62の就業部門の回答からは、どちらとも判別できない。

中断グループの特徴は、子どもを持つ人の割合が多く特に子どもが3人という人の割合が17.0%と他のどのグループよりも多い点である。したがって、親から子どもの世話で協力や支援を受けた人の割合（27.3%）も高く、子どもの育て方において困難を感じる人の割合も高い（28.6%）。このグループの特徴は子育てと就業継続両立の困難さを物語るものでもある。なお、親との同居率が4グループの中で最も低い（13.0%）にもかかわらず、舅、姑との関係で問題を感じる人の割合が最も高く（16.9%）になっている。

### Ⅲ. C. ジェンダー意識について

生物学的性差 sex に対してジェンダー gender とは社会的、文化的に形成された性差であるという定義が示すように、人は生まれた瞬間から家庭環境、学校教育、社会環境、メディア、会社環境などから様々な情報を自己の中に取り込みジェンダー意識を形成する。人がなぜそのようなジェンダー意識を持っているのか各要因を分離することは難しいが、自己の体験やジェンダー・フリーな教育による意識喚起が重要なジェンダー意識構成要因となることは否定できない。

図22はジェンダー意識を調査したものである。サンプル全体の集計に加えて、就業継続グループと再就業グループを合わせたものを「就業グループ」とし、

中絶グループと無就業グループを合わせたものを「無就業グループ」としてそれぞれクロス集計した数値を載せている。また、20代から60代の年代別にもクロス集計しているが、それぞれの数値は記さずに年代別相関係数のみを記載している。この集計において、賛成派（「賛成」と「どちらかといえば賛成」のパーセンテージを足したもの）または、反対派（「どちらかといえば反対」と「反対」のパーセンテージを足したもの）で、就業グループと無就業グループの間に10.0ポイント近くあるいはそれ以上の意識差が見られるものを次に取り上げる。

まず、就業グループは、「女性も結婚後も職業を持って自立」し（問30 賛成派：67.6% vs. 58.9%）、「子どもを保育施設に預けられれば母親も職業を持った方がよい」と考え（問29 賛成派：41.7% vs. 26.0%）、その自立心の強さからか「夫婦別姓」を強く望んでいる（問34 賛成派：53.7% vs. 42.5%、反対派12.0% vs. 24.7%）。ところが、就業グループは問29で3歳児神話を概念的には否定しているものの問32の「子どもが小さいうちは少なくとも3歳までは母親が育児に専念すべき」ことに4.7%（賛成派：63.0% - 58.3% = 4.7%）しか差が見られないのは、どの母親にとっても子育ては最大の問題であり、うしろ髪を引かれる思いで出勤する幼い子どもを持つ母親の気持ちの表れではないだろうか。この子育てに関して、両グループの立場は微妙である。問38の「母親の評価は子育ての評価によって決まる」かどうかについて、就業グループも無就業グループも同程度の割合（27.8%、27.4%）で、どちらとも言えないという立場をとっているが、就業グループが約10.0ポイント多く賛成派にまわり、（25.0% vs. 15.1%）、無就業グループは約10.0ポイント多く反対派にまわっている。（47.2% vs. 57.5%）これは、どちらのグループも子育てを重要視するが、就業グループは仕事だけでなく子育てにも成果をより強く望み、無就業グループはある意味で仕事という逃げ道がないだけに子育て成果のマイナス面も含めた全面的評価を母親に押し付けられたくないという気持ちがより強く表れたものととれる。

またグループ間の意識に大きな差が表れているものとして無就業グループの

30.0%は、「女性は主婦専業でも家事労働をしているので経済的に自立しているのと同じだ」と考えているのに対して、就業グループの賛成派は19.4%にすぎない。この設問の解釈の仕方も、女性の無償労働を問題とするマルクス主義フェミニズム理論の立場をとれば無就業グループの主張も成立する。なぜなら、専業主婦の家事労働全般を有償労働として計算した額によると、ほぼ日本人の平均収入と同額になるからである。したがって、当事者にとっては専業主婦の立場は意図的な選択肢の1つなのである。

図22の各ジェンダー意識と年代ごとの相関関係を調べた場合、相関係数が最も高いのは男性の育児休暇取得に関するもので年代が高くなるほどそれを望む声が強い（問40 相関係数：0.270）さらに、高い年代ほど賛成派が多くなるものは、夫婦別姓（問34 相関係数：0.203）、経済的自立（問30 相関係数：0.201）、育児と仕事の両立（問29 相関係数：0.161）に関するものであり、家庭を持つことの有無に関しては、価値観の多様化がうかがえる（問36, 問37）。この傾向は、実社会の体験をへて体得したものによると思われる。図22で、マイナスの相関係数を示しているものとして、若い世代ほど家事労働を有償労働とみなす、あるいは割り切る傾向が強い一方で（問31相関係数：-0.192）、3歳児神話は子育ての経験が浅い若い世代ほど「神話」として存在していることがうかがえる。

就業タイプや年齢にかかわらず、平均的な数値を示しているものは、夫婦の家事分担（問34）、女性運動（問41, 問42）、日本社会の男女平等（問43）に関するものである。これらの内容は、すべて規範的なもの（normative values）で職業や年齢にかかわらず、各自が価値観として意識内に取り込んだ結果と思われる。

## IV. 結 論

### IV. A. 同志社女子大学卒業生にみる女性像

矛盾するようであるが、平均的な女性像というものは存在しない。各自が独



自のアイデンティティをもっているがゆえに性差よりも大きな個人差を無視して女性をひとまとめにして語るところに無理があり、どのように周到に用意された統計もエスノグラフィックな手法が描き出すようなステレオタイプ化しない現実を描くことは困難である。また統計的平均値と割り切って女性白書や男女共同参画白書などの数値と本稿の統計平均値を比べても、同一アンケート調査に対する回答ではないので厳密な比較とはいえない。さらに1つの女子大学に限定するだけでバイアスがかかり、このようなアンケート調査に協力してくれた卒業生182人はさらにふるいにかかったことになる。そこで本稿の表題に立ち返って今回の調査結果に表れた同志社女子大学卒業生の女性像ということに限定して、集計数値と記述式回答の行間を読み解く形で質問領域ごとに要点のみをまとめてみたい。

大学生生活全般について、同窓の卒業生でも年代別、就業タイプ別に特徴が見られる。たとえば50代と60代にはキリスト教主義的な教育がより強く根づいているが、大学が全国的に大衆化しだした40代より若い世代は学生のニーズが多様化したあとが見て取れる。そしてそのニーズの内容を考えた場合、各自が大学で身につけたものと卒業後歩んだライフコースにある程度の関連性が表れていることは興味深い。そして60%以上が授業と交友関係を重視し約半数が教養を身につけ人間的に成長していることから多くの学生が極めて真面目な学生生活を送ったことが想像できる。そして彼女たちが理想とする女性像からも建学の精神が根づいていることがうかがえる。これらのことは教育理念と教育目標を実現するためのカリキュラムの構築とその内容充実の必要性を示唆するものである。送り手と受け手の相互作用で成り立つ教育的営みは常に送り手の意識が問われ、受け手への波及効果について配慮する必要がある。

就業状況と仕事に関するジェンダー意識からは、日本の労働市場における女性の問題が凝縮された形で表れている。女性にとって最大の課題である仕事と家庭の両立の問題点が、就業継続グループ、再就業グループの各集計結果に表れた形となっている。就業継続グループと再就業グループは経済的、精神的恩恵のためにある程度心理上および健康上の犠牲を払いながら就業を続けている

状況である。なかでも再就業率は高い率を示したが、その理由としては経済的なものと生き甲斐を得たり能力を生かすなどの心理的ニーズが同じ程度の割合で出ている。中断グループは家庭と子育てを最優先した結果であるが、必ずしも中断以前からライフコース選択に関する明確な意志を持っていたわけではないことが明らかになっている。無就業グループは高いジェンダー意識を有していると同時に、経済的、時間的に余裕のある階層であることが推測できる。女性役割受容に関しては合理的選択仮説をある程度裏付けるのもで、仕事と家庭の二重負担を負っている就業グループよりも相対的に恵まれた状況が読み取れる。

#### IV. B. 女子大学の存在意義

女子大学であれ男女共学大学であれ、女性を真にエンパワーメントできる時、教育機関としての存在意義が認められるのではないだろうか。それならば男女共学大学は、多くの研究者が共学教育現場を克明に観察した結果指摘したように（サドカー 1997；木村 2000など）その教育環境と教育プロセスにおいてジェンダー・バイアスを再生産する本質的性癖を備えている。すなわち、男女共学大学の教職員全体に意識変革が起こらない限り、女子学生のエンパワーメントを達成しにくいという制度的、構造的欠陥をかかえている。

それに対して女子大学の教職員は、大多数の学生が卒業後のための就職活動や進路決定に際して直面する男女格差の問題を通じて、常に女性のエンパワーメントの必要性和向き合わざるを得ない。したがって、女子大学が組織としてまずは自らの意識喚起とエンパワーメントを行い、学生のエンパワーメントに真摯に取り組む時にこそ、その存在意義が大いに発揮されるといえよう。その点で青木生子（1998）が抱いた女子大学の積極的存在意義が薄れるという危惧の念とは逆説的に、女子大学は制度的、構造的に利点を有しているのではないだろうか。教育に携る者が、社会および学校教育のプロセスにおいてジェンダー・バイアスが再生産される仕組みを理解し女性のエンパワーメントを目指すならば、ここに、日本の女子大学は教育機関としての存続と意義において大いなる可能性を内蔵していると考えられる。

図 1-a 問 1. 学生生活を通じて、得るものが多く有意義だったと思うものを次の中から3つ選んで下さい。

	授業	卒論ゼミ	チャペル	クラブ同好会	リトリート	スポーツフェス	サマーカーニバル	スキーキャンプ	大学祭	寮生活	交友関係	アルバイト	海外留学	その他
全体(人)	116	57	32	80	4	1	11	1	21	39	115	42	13	8
全体(%)	63.7	31.3	17.6	44.0	2.2	0.5	6.0	0.5	11.5	21.4	63.2	23.1	7.1	4.3
23-29	65.8	39.5	5.3	36.8	7.9	2.6	5.3	0.0	7.9	7.9	52.6	28.9	21.1	13.1
30-39	60.0	32.5	15.0	37.5	0.0	0.0	7.5	0.0	7.5	15.0	67.5	42.5	7.5	0.5
40-49	70.5	22.7	13.6	45.5	2.3	0.0	2.3	2.3	15.9	20.5	77.3	18.2	4.5	2.3
50-59	54.3	25.7	31.4	62.9	0.0	0.0	11.4	0.0	20.0	31.4	54.3	5.7	0.0	0.0
60-69	68.0	40.0	28.0	76.0	0.0	0.0	4.0	0.0	4.0	40.0	60.0	16.0	0.0	0.0

図 2-a 問 2. 大学時代を通じて、どのようなことが身についたと思いますか。次から3つ選んでください。

	自信	教養	コンピュータスキル	社交性	専門知識	対人関係能力	集団活動実践能力	語学力	情報収集能力	思考力	問題解決能力	創造性	人格形成	その他
全体(人)	44	99	11	42	59	49	33	17	15	49	19	13	80	4
全体(%)	24.2	54.4	6.0	23.1	32.4	26.9	18.1	9.3	8.2	26.9	10.4	7.1	44.0	2.2
23-29	7.9	63.2	21.0	18.4	26.3	21.1	15.8	7.9	18.4	23.7	7.9	7.9	50.0	2.6
30-39	25.0	47.5	5.0	27.5	35.0	27.5	7.5	10.0	12.5	30.0	12.5	7.5	35.0	2.5
40-49	34.1	59.1	2.3	31.8	38.6	27.3	22.7	9.1	4.5	20.5	4.5	6.8	34.1	4.5
50-59	22.9	45.7	0.0	20.0	25.7	25.7	22.9	5.7	2.9	40.0	14.3	8.6	57.1	0.0
60-69	32.0	56.0	0.0	12.0	36.0	36.0	24.0	16.0	0.0	20.0	16.0	4.0	48.0	0.0

図 1-b 問 1. 学生生活を通じて、得るものが多く有意義だったと思うものを次の中から3つ選んで下さい。

	授業	卒論ゼミ	チャペル	クラブ同好会	リトリート	スポーツフェス	サマーカーニバル	スキーキャンプ	大学祭	寮生活	交友関係	アルバイト	海外留学	その他
全体(人)	116	57	32	80	4	1	11	1	21	39	115	42	13	8
全体(%)	21.5	10.6	6.0	14.8	0.7	0.2	2.0	0.2	3.9	7.2	21.3	7.8	2.4	1.4
継続	22.7	9.8	5.3	13.6	0.8	0.8	1.5	0.0	2.3	4.5	22.7	10.6	3.8	1.5
再就業	21.1	11.6	4.7	16.8	0.5	0.0	2.1	0.0	3.7	5.8	19.5	7.9	3.7	2.6
中断	20.3	10.1	5.1	13.0	0.7	0.0	2.2	0.7	5.8	8.0	24.6	8.0	0.7	0.7
無就業	23.4	10.4	10.4	14.3	1.3	0.0	2.6	0.0	3.9	13.0	18.2	2.6	0.0	0.0

図 2-b 問 2. 大学時代を通じて、どのようなことが身についたと思いますか。次から3つ選んでください。

	自信	教養	コンピュータスキル	社交性	専門知識	対人関係能力	集団活動実践能力	語学力	情報収集能力	思考力	問題解決能力	創造性	人格形成	その他
全体(人)	44	99	11	42	59	49	33	17	15	49	19	13	80	4
全体(%)	8.2	18.5	2.0	7.8	11.0	9.2	6.2	3.2	2.8	9.2	3.6	2.4	15.0	0.7
継続	3.9	21.7	5.4	7.0	10.9	5.4	5.4	5.4	4.7	10.1	2.3	2.3	14.0	1.6
再就業	10.7	18.2	1.6	9.1	10.2	9.1	5.3	3.2	2.1	8.6	2.1	2.7	16.6	0.5
中断	8.0	18.8	0.7	8.7	13.0	7.2	8.0	2.9	2.9	11.6	3.6	1.4	13.0	0.0
無就業	10.4	14.3	0.0	5.2	10.4	18.2	6.5	0.0	1.3	5.2	7.8	3.9	15.6	1.3

図3-a 問5. 大学時代、生き方を考える上でお手本となる教員がいましたか。

	女性教員でいた	男性教員でいた	いなかった	未回答
全体	35.2	18.7	45.1	1.1
23-29	26.3	26.3	47.4	0.0
30-39	27.5	20.0	50.0	2.5
40-49	36.4	18.1	45.5	0.0
50-59	42.8	8.6	48.6	0.0
60-69	48.0	20.0	28.0	4.0

図3-b 問5. 大学時代、生き方を考える上でお手本となる教員がいましたか。

	女性教員でいた	男性教員でいた	いなかった	未回答
全体	35.2	18.7	45.1	1.1
継続	25.0	20.5	54.5	0.0
再就業	42.9	23.8	33.3	保留
中断	32.6	10.9	56.5	保留
無就業	42.3	19.2	38.5	0.0

図4-a 問6. 大学時代、生き方を考える上でお手本となる先輩がいましたか。

	本学学生	本学卒業生	他大学学生	他大学卒業生	いなかった	未回答
全体	30.8	16.5	3.3	48.4	0.5	0.5
23-29	15.8	21.1	5.3	55.3	2.6	0.0
30-39	22.5	20.0	2.5	52.5	0.0	2.5
40-49	38.6	18.2	4.5	38.6	0.0	0.0
50-59	51.4	14.3	2.9	31.4	0.0	0.0
60-69	24.0	4.0	0.0	72.0	0.0	0.0

図4-b 問6. 大学時代、生き方を考える上でお手本となる先輩がいましたか。

	本学学生	本学卒業生	他大学学生	他大学卒業生	いなかった	未回答
全体	30.8	16.5	3.3	48.4	0.5	0.5
継続	13.6	20.5	2.3	61.4	2.3	0.0
再就業	46.0	17.5	1.6	34.9	0.0	保留
中断	17.0	12.8	8.5	61.7	0.0	0.0
無就業	50.0	15.4	0.0	34.6	0.0	0.0

図5 問10. 同志社女子大学の建学の精神のうち、覚えておられるものを次から選んでください。  
(複数選択可)

	全体	継続	再就業	中断	無就業
キリスト教の人間観にもとづいた教育を行う。	72.0	42.0	41.7	45.6	40.5
女性の人格を尊重し、自立した人間として豊かな人生を過ごせる教養を身につける。	52.0	27.5	35.7	26.6	33.3
社会に貢献しようとする意志を持った女性を育てる。	30.2	17.4	18.3	19.0	16.7
建学の精神については、ほとんど覚えていない。	13.7	13.0	4.3	8.9	9.5

図6 問12. 同志社女子大学の教育理念のうち、覚えておられるものを次から選んでください。  
(複数選択可)

	全体	継続	再就業	中断	無就業
キリスト教に基づく他者への愛を大切にする「良心」を育む。	59.9	25.6	30.6	45.5	36.5
一人ひとりが個性や能力をのばせるように「自主・自立の精神」を尊重する。	38.5	16.7	23.4	23.4	25.0
専門分野にかたよらず幅広い分野の学問を修め、豊かな教養と幅広い視野を身につける。	33.0	24.4	18.0	16.9	15.4
本学誕生の由来ともかかわる国際的な視点・考え方を育む。	29.7	19.2	19.8	7.8	19.2
教育理念についてはほとんど覚えていない。	14.8	14.1	8.1	6.5	3.8

図7 問11. 建学の精神を知っている・知らないにかかわらず、学生間、教職員間に建学の精神について理解を深める機会を増やすことは、どの程度必要とお考えですか。

	とても必要	やや必要	何ともいえない	あまり必要ない	全く必要ない
全体	40.7	36.3	19.2	3.8	0.0
継続	36.4	47.7	13.6	2.3	0.0
再就業	42.2	34.0	18.8	4.7	0.0
中断	36.2	34.0	25.5	4.3	0.0
無就業	50.0	26.9	19.2	3.8	0.0

図8 問13. 教育理念を学生間、教職員間に徹底させることはどの程度必要とお考えですか。

	とても必要	やや必要	何ともいえない	あまり必要ない	全く必要ない
全体	41.8	35.2	19.8	3.3	0.0
継続	40.9	40.9	18.2	0.0	0.0
再就業	43.8	40.6	10.9	4.7	0.0
中断	31.9	34.0	31.9	2.1	0.0
無就業	53.8	15.4	23.1	7.7	0.0

図9 問8. 同志社女子大学での大学生活全般を通じて、あなたの満足度は次のどれにあてはまりますか。

	たいへん満足	やや満足	何とも言えない	やや不満	不満足
全体	22.5	50.5	11.5	11.5	3.8
継続	15.9	47.7	22.7	13.6	0.0
再就業	26.6	57.8	6.3	7.8	1.6
中断	14.9	42.6	10.6	21.3	10.6
無就業	38.5	50.0	7.7	0.0	3.8

図10-a 問9. 共学の大学が主流となっていくなかで、あなたは女子大学が必要だと思いますか。

	必要である	ある程度必要	どちらとも言えない	あまり必要ではない	必要ではない
全 体	12.6	22.0	46.2	12.6	6.6
23-29	18.4	12.1	42.1	15.8	2.6
30-39	12.5	20.0	37.5	20.0	10.0
40-49	11.4	31.8	45.5	2.3	9.1
50-59	11.4	22.9	45.7	14.3	5.7
60-69	8.0	8.0	68.0	12.0	4.0

図10-b 問9. 共学の大学が主流となっていくなかで、あなたは女子大学が必要だと思いますか。

	必要である	ある程度必要	どちらとも言えない	あまり必要ではない	必要ではない
全 体	12.6	22.0	46.2	12.6	6.6
継 続	9.1	13.6	45.5	22.7	9.1
再就業	18.8	28.1	37.5	10.9	4.7
中 断	10.6	19.1	53.2	6.4	10.6
無就業	7.7	26.9	57.7	7.7	0.0

図11 回答者の年齢別就業割合

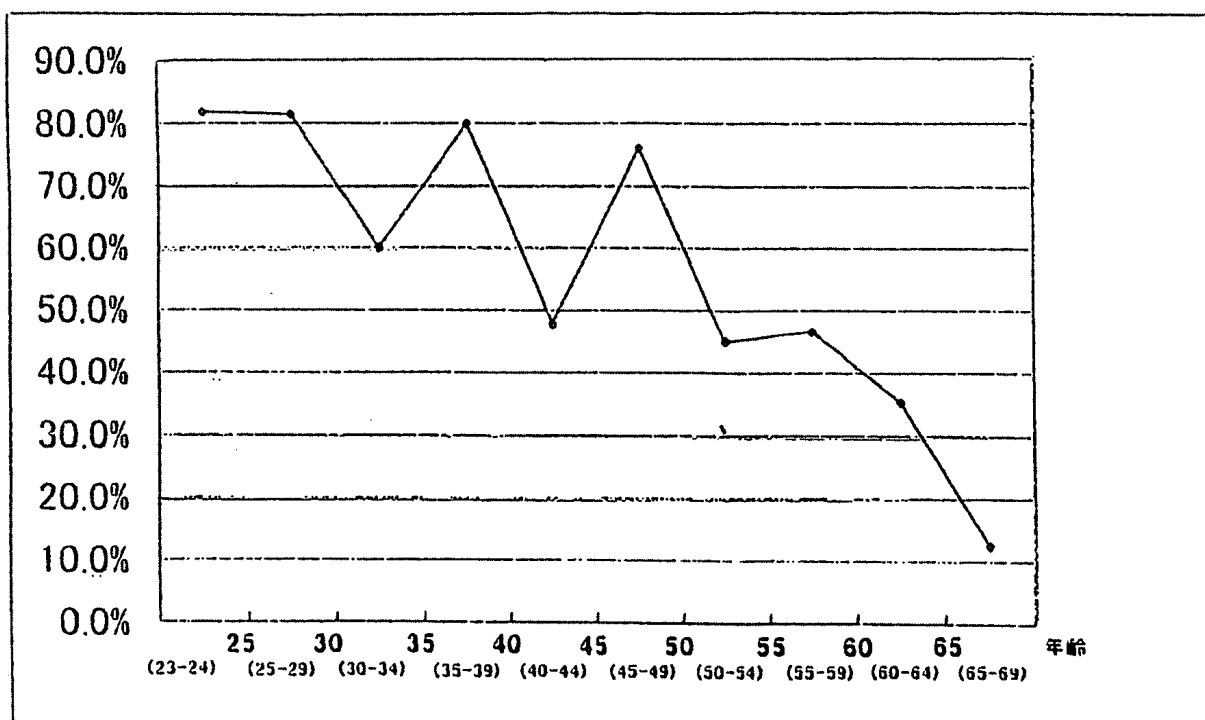


図12 ☆フルタイム、パート、アルバイト、派遣、一時的なものにかかわらず、就業経験のある方にお尋ねします。問61. あなたの勤務先の産業を、次からお選びください。

	建設	製造業	運輸 通信 情報	卸売 小売業 飲食業	金融 保険	教育 サービス	公務	医療	福祉	その他
全 体	1.1	8.8	7.1	16.5	6.6	24.2	11.0	4.9	2.2	11.5
継 続	2.3	15.9	6.8	15.9	2.3	15.9	18.2	9.1	0.0	15.9
再就業	1.6	7.8	6.3	17.2	9.4	34.4	10.9	3.1	1.6	12.5
中 断	0.0	6.4	12.8	21.3	10.6	27.7	10.6	6.4	4.3	8.5

図13 問62. あなたが働いておられる／おられた部門を次からお選びください。

	人事 労務	総務 広報	経理 財務	情報 処理	製造 技術 設計	研究 開発	企画 調査	法務	営業 販売	教員	その他
全 体	5.5	8.8	4.9	6.0	1.6	3.3	4.9	0.5	13.7	19.8	26.4
継 続	6.8	6.8	6.8	4.5	0.0	9.1	2.3	0.0	20.5	20.5	34.1
再就業	6.3	9.4	7.8	6.3	1.6	3.1	7.8	1.6	14.1	20.3	28.1
中 断	6.4	14.9	2.1	10.6	2.1	0.0	6.4	0.0	8.5	23.4	29.8

図14 問23. 質問22. で、1. はい を選ばれた方にお尋ねします。

(1)あなたがずっと働き続けている／いたのはどのような理由からですか。以下から3つまで選んでください。(定年退職された方は以下の答を過去形でお考え下さい。)

1. 生計を維持するために働く必要があるから……………〔21人〕
1. 働いて生活に経済的な余裕がもてるから……………〔21人〕
3. 仕事にやりがいを感じられるから……………〔19人〕
3. 社会とのかかわりをずっと持っていたいから……………〔19人〕
5. 自分の能力や資格を仕事で生かし続けたいから……………〔18人〕
6. 就職してからまだ数年しかたっていない……………〔9人〕
7. 社会人として、働くのが当然だと思うから……………〔8人〕
8. 再就職できたとしても労働条件が今より悪くなると思うから……………〔7人〕
9. 家にいるよりも、外に出て働くほうが自分に向いているから……………〔5人〕
10. 家業のため仕事をやめるわけにはいかないから……………〔2人〕
11. その他 ( ) ……………〔2人〕

図15 (2)あなたが今まで仕事を続けてこられる上で必要だったと思われることはどういうことですか。以下から4つまで選んでください。

1. 女性が働き続けることに対して偏見を持たない職場であること……………〔21人〕
2. 仕事は仕事と割り切って、あまり力を入れすぎないこと……………〔16人〕
3. 通勤時間が短いこと……………〔15人〕
4. 男女関わりなく能力と貢献度で正しく評価される職場である……………〔14人〕
4. 自分の残業や休日出勤が少ないこと……………〔14人〕
6. 結婚、出産後も長く働き続ける手本となる先輩が多いから……………〔13人〕
7. 夫や家族が働き続けることに賛同していること……………〔12人〕
8. いわゆる「手に職」を持っていること……………〔10人〕
9. 男女が平等であるという意識を持っていること……………〔8人〕
10. 保育所が近い、両親の協力、保育環境が整っていること……………〔7人〕
11. 男性以上に仕事に対して厳しくがんばり、成果をあげること……………〔6人〕
12. 産休・育休・育児時間などを取得しやすい職場環境であること……………〔5人〕
12. 家庭のことを、十分にしようと思わないこと……………〔5人〕
12. 職場における女性の権利を獲得することに前向きであること……………〔5人〕
15. 夫や子どもと家事、育児を分担すること……………〔4人〕
16. 夫の残業や休日出勤が少ないこと……………〔0人〕
17. その他（ ）……………〔6人〕

図16 問24. (3)結婚を機に仕事をやめた、または中断されたのはなぜですか。

1. 夫の勤務地が遠かった……………〔14人〕
2. あまり何も考えず、結婚したらやめるものと思ってやめた……………〔13人〕
3. 家庭作りを優先したかった……………〔8人〕
4. 仕事と家庭の両立の為に、精神的肉体的にあくせくするような生活をしたくなかった……………〔7人〕
4. その時の仕事に魅力を感じなくなっていた時期が重なった……………〔7人〕
4. 結婚後も働きつづけたと思うほどの仕事ではなかった……………〔7人〕
4. 妻は働かずに家にいることを夫や家族が望んだ……………〔7人〕
8. 結婚した女性はやめなければならないという職場の雰囲気だった……………〔2人〕
8. 働かなくても、夫の収入で暮らしていた……………〔2人〕
10. 夫の家業を手伝う必要があった……………〔1人〕
11. 外に出て働くより自分には家庭でできることの方が多かった……………〔0人〕
12. その他（ ）……………〔0人〕



図17 問25. (1)あなたが再就業をされたのはどのような理由からですか。次から3つ選んでください。

1. 自分の能力や資格を仕事で生かしたいから……………〔35人〕
2. 社会とのかかわりを持ちたいと思ったから……………〔32人〕
3. 自分の自由になる経済力を手に入れたかったから……………〔28人〕
4. 生計を維持するために働く必要が生じたから……………〔19人〕
5. やりがいのある仕事が見つかったから……………〔18人〕
6. 子育てや介護が一段落して、時間に余裕ができたから……………〔16人〕
7. 家にいるよりも、外に出て働くほうが自分に向いているから……………〔12人〕
7. 家計に経済的な余裕をもちたかったから……………〔12人〕
9. 社会人として、働くのが当然だと思うから……………〔10人〕
10. 家業を手伝う必要が生じたから……………〔2人〕
11. その他 ( ) ……………〔5人〕

図18 問59. あなたにお子さんは何人いらっしゃいますか。

	未回答	0人	1人	2人	3人	4人
継続	43.2	27.3	4.5	20.5	2.3	2.3
再就業	20.3	12.5	14.1	43.8	7.8	1.6
中断	6.4	8.5	25.5	42.6	17.0	0.0
無就業	11.5	7.7	3.8	69.2	7.7	0.0

図19 問60. ご両親（配偶者またはパートナーのご両親）と同居しておられますか。

	はい	いいえ	同居はしていないが近距離の所に住んでいる	すでに他界している
継続	40.0	40.0	8.6	11.4
再就業	30.5	47.5	11.9	10.2
中断	13.0	54.3	19.6	13.0
無就業	40.9	27.3	9.1	22.7

図20 問50. あなたは卒業後、ご両親（配偶者またはパートナーのご両親）からどのような協力・支援を受けたとお思いますか。次から選んでください。（複数選択可）

	全体	全体	継続	再就業	中断	無就業
自分または子どもの教育費	43	14.3	6.3	18.3	14.3	15.4
子どもの世話	71	23.6	21.9	22.5	27.3	23.1
不動産取得	45	15.0	14.1	14.2	15.6	17.9
家業継続	6	2.0	3.1	1.7	0.0	2.6
会社設立	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
自分または家族の就職	12	4.0	7.8	4.2	2.6	0.0
食料品、物品	106	35.2	37.5	34.2	33.8	38.5
その他	18	6.0	9.4	5.0	6.5	2.6

図21 問51. 卒業後今までの人生で、どのような困難や荒波をお感じになりましたか。  
次の中からあてはまるものすべてを選んで下さい。

	全体	全体	継続	再就業	中断	無就業
子どもの育て方	55	18.0	5.6	18.9	28.6	18.6
子どもの不登校	6	2.0	0.0	4.5	1.3	0.0
子どものいじめ問題	11	3.7	2.8	1.8	3.9	9.3
子どもの家庭内暴力	3	1.0	0.0	0.9	1.3	2.3
夫からの暴力	3	1.0	0.0	1.8	0.0	2.3
アルコール依存症	2	0.7	1.4	0.0	0.0	2.3
夫の異性関係	6	2.0	0.0	2.7	2.6	2.3
自分自身の異性関係	6	2.0	4.2	3.6	0.0	0.0
セクハラ	7	2.3	4.2	0.0	0.0	2.3
家庭と仕事の両立	24	8.0	18.1	4.5	5.2	4.7
離婚	8	2.7	1.4	4.5	1.3	2.3
父母との関係	19	6.3	9.7	5.4	5.2	4.7
舅・姑との関係	35	11.6	5.6	9.0	16.9	16.3
経済的な問題（リストラや倒産等）	15	5.0	8.3	5.4	3.9	0.0
自分や家族の健康上の問題	49	16.2	20.8	16.2	16.9	7.0
特になし	42	14.0	12.5	13.5	11.7	20.9
その他	15	5.0	5.6	7.2	1.3	4.7

図22 ☆あなたは次のような考えに賛成ですか。あてはまるもの1つを選んでください。

		賛成	どちらか		反対	未回答	
			といえば 賛成	とも言 えない			
問28. 女性は経済的に必要がなければ無理してまで職業を持たないでよい。 〔年代別相関係数：-.164*〕	全体	4.9	9.3	34.1	35.2	16.5	0.0
	就業	3.4	10.2	35.2	35.2	15.9	0.0
	無就業	6.4	8.5	33.0	35.1	17.0	0.0
問29. 子どもを保育施設に預けられれば母親も職業を持った方がよい。 〔年代別相関係数：.161*〕	全体	15.9	19.2	39.6	19.8	5.5	0.0
	就業	20.5	18.2	42.0	12.5	6.8	0.0
	無就業	11.7	20.2	37.2	26.6	4.3	0.0
問30. 女性も、結婚後も職業を持って経済的に自立するほうがよい。 〔年代別相関係数：.201**〕	全体	29.1	34.6	30.2	4.9	1.1	0.0
	就業	33.0	34.1	27.3	3.4	2.3	0.0
	無就業	25.5	35.1	33.0	6.4	0.0	0.0
問31. 女性は主婦専業でも家事労働をしているので経済的に自立しているのと同じだ。〔年代別相関係数：-.192**〕	全体	11.5	12.6	37.9	20.9	16.5	0.5
	就業	6.9	12.6	42.5	19.5	18.4	1.1
	無就業	16.0	12.8	34.0	22.3	14.9	0.0
問32. 子どもが小さいうちは少なくとも3歳までは母親が育児に専念するべきだ。〔年代別相関係数：-.185*〕	全体	34.1	26.4	26.4	9.9	2.7	0.5
	就業	33.0	22.7	26.1	15.9	2.3	0.0
	無就業	35.1	29.8	26.6	4.3	3.2	1.1
問33. 共働きの家庭では、家事は夫と妻が同じ位分担してやるのがよい。 〔年代別相関係数：.127〕	全体	51.1	26.4	19.8	2.2	0.5	0.0
	就業	58.0	27.3	13.6	1.1	0.0	0.0
	無就業	44.7	25.5	25.5	3.2	1.1	0.0

		賛成	どちらか といえば 賛成	どちら とも言 えない	どちらか といえば 反対	反対	未回答
問34. 夫婦別姓は法的に認められるべきである。 〔年代別相関係数：.203**〕	全 体	29.7	19.8	33.5	7.1	9.9	0.0
	就 業	29.5	23.9	34.1	5.7	6.8	0.0
	無就業	29.8	16.0	33.0	8.5	12.8	0.0
問35. 介護は女性の役割である。 〔年代別相関係数：-.182*〕	全 体	0.5	1.1	17.6	26.9	53.8	0.0
	就 業	0.0	1.1	14.8	28.4	55.7	0.0
	無就業	1.1	1.1	20.2	25.5	52.1	0.0
問36. 女性は結婚しなくても充実した生活を送ることができる。 〔年代別相関係数：.167**〕	全 体	25.3	20.9	41.2	9.9	2.7	0.0
	就 業	25.0	22.7	39.8	9.1	3.4	0.0
	無就業	25.3	20.9	41.2	9.9	2.1	0.0
問37. 女性は子どもを持たなくても充実した人生を送ることができる。 〔年代別相関係数：.169*〕	全 体	26.9	18.7	35.2	14.3	4.9	0.0
	就 業	26.1	14.8	42.0	13.6	3.4	0.0
	無就業	27.7	22.3	28.7	14.9	6.4	0.0
問38. 母親の評価は子育ての評価によって決まる。 〔年代別相関係数：.026〕	全 体	2.7	18.1	27.5	19.8	31.9	0.0
	就 業	2.3	22.7	25.0	18.2	31.8	0.0
	無就業	3.2	13.8	29.8	21.3	31.9	0.0
問39. 女性は子育てを通じて自己実現ができる。 〔年代別相関係数：-.135〕	全 体	2.2	14.3	38.5	25.3	19.8	0.0
	就 業	2.3	11.4	44.3	28.4	13.6	0.0
	無就業	2.1	17.0	33.0	22.3	25.5	0.0
問40. 男性も育児休業をとるような社会環境をつくることが望ましい。 〔年代別相関係数：.270**〕	全 体	53.8	29.7	12.1	3.3	1.1	0.0
	就 業	52.3	33.0	12.5	2.3	0.0	0.0
	無就業	55.3	26.6	11.7	4.3	2.1	0.0
問41. 社会の中に男女不平等な点があれば女性が行動を起こすべきである。 〔年代別相関係数：-.037〕	全 体	25.8	37.9	31.3	3.8	1.1	0.0
	就 業	26.1	39.8	29.5	2.3	2.3	0.0
	無就業	25.5	36.2	33.0	5.3	0.0	0.0
問42. 社会の中に男女不平等な点があれば男性の意識を改革することが必要である。〔年代別相関係数：.014〕	全 体	50.0	37.9	11.5	0.5	0.0	0.0
	就 業	48.9	39.8	11.4	0.0	0.0	0.0
	無就業	51.1	36.2	11.7	1.1	0.0	0.0
問43. 現在、日本の社会は全体として男女平等な社会である。	全 体	1.6	7.1	25.8	36.3	28.6	0.5
	就 業	0.0	8.0	26.1	31.8	33.0	1.1
	無就業	3.2	6.4	25.5	40.4	24.5	0.0

注：Pearson の相関係数，N = 182；\* $p < .05$ ；\*\* $p < .001$

## 参考文献

- 青木生子『青木生子著作集第11巻 明日の女子教育を考える』東京：おうふう，1998.
- Cohen, Allan and Bradford, David. *Influence without Authority*. New York: John Wiley & Sons, Inc. 1991.
- 同志社女子大学125年編集委員会（編）『同志社女子大学125年』京都：同志社女子大学，2000.
- 井上輝子，江原由美子（編）『女性のデータブック〔第3版〕』東京：有斐閣，1999.
- 木村涼子『学校文化とジェンダー』東京：勁草書房，2000.
- 国立大学協会・男女共同参画に関するワーキング・グループ『国立大学における男女共同参画を推進するために』東京：国立大学協会事務局，2000.
- 国立婦人教育会館女性学・ジェンダー研究会『女性学教育／学習ハンドブック〔新版〕』東京：有斐閣，1999.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局（編）『平成14年版 女性労働白書』東京：財団法人21世紀職業財団，2003
- McVeigh, B.J. *Life in a Japanese Women's College: Learning to be Ladylife*. New York: Routledge, 1997.
- McVeigh, B.J. *Japanese Higher Education as Myth*. New York: M.E. Sharpe, 2002.
- 三宅えり子「本学卒業生対象『教育とジェンダー』に関する意識調査—研究資料データ」『総合文化研究所紀要』第20巻 京都：同志社女子大学総合文化研究所，2003. pp.116-129.
- 宮澤正典「新島襄と女子教育」同志社（編）『新島襄—近代日本の先覚者—』東京：晃洋書房，1993. pp.83-98.
- 内閣府男女共同参画局（編）『男女共同参画白書（平成13年度版）』東京：財務省印刷局，2001.
- 内閣府男女共同参画局（編）『男女共同参画白書（平成15年度版）』東京：国立印刷局，2003.
- サドカー，マイラ&デイヴィッド，川合あさ子（訳）『「女の子」は学校でつくられる』東京：時事通信社，1997.
- Tidball, M.Elizabeth; Smith, Daryl G. ; Tidball, Charles S. ; and Wolf-Wondel, Lisa E. *Taking Women Seriously: Lessons and Legacies for Educating the Majority*. Phoenix, Arizona: American Council on Education/ Oryx Press, 1999.

## 参考資料

学科別サンプル数（合計500人 無作為抽出）

年代(卒業年度)	英語英文学科		日本語日本文学科		音楽学科		人間生活学科		食物栄養科学科	
	全 体	サンプル	全 体	サンプル	全 体	サンプル	全 体	サンプル	全 体	サンプル
20歳代(95-01)	2,791	44	1,430	23	945	15	886	14	1,174	19
30歳代(85-94)	3,621	57	382	6	806	13	1,027	16	1,583	25
40歳代(75-84)	3,759	60	0	0	293	5	1,034	16	1,514	24
50歳代(65-74)	3,319	53	0	0	216	3	1,436	23	907	14
60歳代(55-64)	2,331	37	0	0	157	2	1,945	31	0	0
合 計	15,821	251	1,812	29	2,417	38	6,328	100	5,187	82

問52. あなたの卒業年度と学部, 学科を書いてください。

西暦\_\_年\_\_学部\_\_学科

全体	英文	日学	音楽	家政	食物	未回答
182 (人)	84	14	9	42	32	1
100 (%)	46.2	7.7	4.9	23.1	17.6	0.5

問53. あなたの年齢をお知らせください。

全体	23～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳
182人	38人	40人	44人	35人	25人

問15～問20

☆あなたは次のような事柄についてどのようにお考えですか。

	非常にそう 思う	そう思う	なんとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	未回答
問15. 小学校では, 男子生徒と平等に扱われた	14.3	54.4	13.7	14.8	2.7	0.0
問16. 中学校では, 男子生徒と平等に扱われた	9.9	42.3	20.9	17.0	6.0	3.8
問17. 高等学校では, 男子生徒と平等に扱われた	10.4	37.4	23.1	17.0	6.0	6.0
問18. 家庭においては, 性差に関係なくしつけられた	8.8	34.6	14.8	29.1	12.1	0.5
問19. 性差に関する固定観念は, 学校においても植えつけられてしまう	9.3	37.4	20.9	28.0	3.3	1.1
問20. 学校ではジェンダー・フリーな(性差に偏りのない)教育をすすめるべきである	37.4	32.4	19.2	9.3	1.1	0.5

問27. あなたに娘さんがおられると仮定した場合、娘さんにはどのような働き方をして欲しいと思われ  
れますか。

	全 体	就 業	無就業
結婚と同時に仕事を辞める	4.4	1.1	7.4
出産と同時に仕事を辞める	6.6	4.5	8.5
結婚・出産を経ても仕事を続ける	29.7	36.4	23.4
特に仕事をする必要がない	1.1	0.0	2.1
子どもが小さいうちは育児に専念し、手 を離れたら再就職する	39.0	34.1	43.6
その他	10.4	9.1	11.7
未回答	8.8	14.8	3.2

☆あなたは次の内容について、どの程度ご存知ですか。

		良く 知っている	少し 知っている	知らない	未回答
問44. 男女共同参画社会	全 体	12.6	40.7	46.7	0.0
	就 業	12.5	36.4	51.1	0.0
	無就業	12.8	44.7	42.6	0.0
問45. 男女共同参画社会基本法	全 体	3.3	19.8	76.9	0.0
	就 業	1.1	18.2	80.7	0.0
	無就業	5.3	21.3	73.4	0.0
問46. 育児・介護休業制度	全 体	30.8	65.4	3.8	0.0
	就 業	28.4	68.2	3.4	0.0
	無就業	33.0	62.8	4.3	0.0
問47. 男女雇用機会均等法	全 体	44.5	53.3	2.2	0.0
	就 業	43.2	55.7	1.1	0.0
	無就業	45.7	51.1	3.2	0.0
問48. 女子差別撤廃条約	全 体	8.8	34.6	56.0	0.5
	就 業	8.0	40.2	51.7	0.1
	無就業	9.6	29.8	60.6	0.0
問49. 配偶者からの暴力の防止及び被害 者の保護に関する法律	全 体	22.5	58.8	18.1	0.5
	就 業	19.3	60.2	20.5	0.0
	無就業	25.8	58.1	16.1	0.1

問24. 質問22. で、2. いいえ を選ばれた方にお尋ねします。

(1)仕事をやめた、または中断されたのはなぜですか。

- |                    |       |                |       |
|--------------------|-------|----------------|-------|
| 1. 留学や進学をしたから→(2)へ | [ 5人] | 2. 結婚したから→(3)へ | [54人] |
| 3. 育児のため→(4)へ      | [19人] | 4. 介護のため→(5)へ  | [ 2人] |
| 5. 夫が転勤したから        | [ 6人] | 6. その他 ( )     | [17人] |

(2)留学や進学をされたのはなぜですか。

- |                        |       |
|------------------------|-------|
| 1. 仕事の上でキャリアアップしたかったから | [ 3人] |
| 2. 技術や資格をとりたかったから      | [ 5人] |
| 2. 新しく勉強したい分野ができたから    | [ 4人] |
| 4. 生き方を見直してみたかったから     | [ 1人] |
| 5. その他 ( )             | [ 0人] |

問26. 大学卒業後、就業されなかった方にお尋ねします。あなたが仕事につかなかったのはなぜですか。

- |                          |       |
|--------------------------|-------|
| 1. つきたい仕事なかったから          | [ 2人] |
| 2. 趣味や勉強など、やりたいことがあったから  | [ 5人] |
| 3. 家事を手伝う必要があったから        | [ 1人] |
| 4. 結婚したから (することになっていたから) | [16人] |
| 5. 親から、就職する必要はないと言われたから  | [ 4人] |
| 6. その他 ( )               | [ 4人] |

問54. あなたには現在、配偶者またはパートナーがおられますか。

- |       |        |        |       |
|-------|--------|--------|-------|
| 1. いる | [136人] | 2. いない | [44人] |
|-------|--------|--------|-------|

問55. (1と答えた方へ) 配偶者またはパートナーの方の最終学校は以下のうちどれですか。

- |            |        |          |       |
|------------|--------|----------|-------|
| 1. 高校      | [ 5人]  | 2. 短大・高専 | [ 2人] |
| 3. 大学      | [103人] | 4. 大学院   | [25人] |
| 5. その他 ( ) | [ 2人]  |          |       |

問56. 配偶者またはパートナーの方の職種は次のどれに該当しますか。

- |             |       |              |       |
|-------------|-------|--------------|-------|
| 1. 会社員・団体職員 | [88人] | 2. 公務員       | [20人] |
| 3. 自営業      | [18人] | 4. 家業        | [ 1人] |
| 5. 無職       | [ 4人] | 6. パート・アルバイト | [ 0人] |
| 7. その他 ( )  | [ 6人] |              |       |

問57. 配偶者またはパートナーの方はご出身家庭において、次のどれに該当しますか。

- |            |       |       |       |
|------------|-------|-------|-------|
| 1. 長男      | [83人] | 2. 次男 | [45人] |
| 3. 三男      | [ 8人] | 4. 四男 | [ 0人] |
| 5. その他 ( ) | [ 0人] |       |       |



## *Doshisha Women's College of Liberal Arts*

同志社女子大学研究プロジェクト「教育とジェンダーに関する意識調査」

2002年3月実施

1. 学生生活を通じて、得るものが多く有意義だったと思うものを次の中から3つ選んで下さい。  
(以下、選択肢のあるものは、回答用紙にご記入ください。「その他」を選ばれた場合や記述式質問の具体的なお答も回答用紙にご記入の上、回答用紙のみご返送ください。)
  1. 授業    2. 卒論ゼミ    3. チャペルアワー    4. クラブ、サークル、同好会    5. リトリート  
6. スポーツフェスティバル    7. サマーキャンプ    8. スキーキャンプ    9. 大学祭  
10. 寮生活    11. 交友関係    12. アルバイト    13. 短期・長期海外留学    14. その他 (    )
  2. 大学時代を通じて、どのようなことが身についたと思いますか。次から3つ選んでください。  
1. 自信    2. 教養    3. コンピュータ・スキル    4. 社交性    5. 専門知識  
6. 対人関係を円滑に行う能力    7. 集団活動実践に必要な能力    8. 語学力    9. 情報収集能力  
10. 思考力    11. 問題解決能力    12. 創造性    13. 人格形成    14. その他 (    )
  3. 大学時代に最も印象に残っている授業とその理由を書いてください。  
(    )
  4. 今の学生や社会のニーズを考慮した上で、大学時代に履修した授業以外に、あなたはどのような授業があれば望ましいと思いますか。思いつくもの全てを書いてください。  
(    )
  5. 大学時代、生き方を考える上でお手本となる教員がいましたか。  
1. 女性教員でいた    2. 男性教員でいた    3. いなかった
  6. 大学時代、生き方を考える上でお手本となる先輩がいましたか。  
1. 本学学生／卒業生でいた    2. 他大学学生／卒業生でいた    3. その他 (    )    4. いなかった
  7. 大学の就職支援について、あなたについて当てはまるものを選んでください。(複数選択可)  
1. 希望する会社に就職することができたので、とても役立ったと思う。  
2. 就職活動のプロセスと方法がよくわかり、役立った。  
3. 業種や企業に関する情報をもっと知りたかった。  
4. 企業における男女格差についてもっと知っておきたかった。  
5. 今仕事をしているのは、大学の就職支援とは直接関係がない。  
6. 自分に合った職業選択の支援をもっとしてほしい。  
7. 2年次くらいの早い時期から、人生設計あるいはキャリア・プランニングに関する話が聞きたかった。  
8. 就職活動を行わなかった。    9. その他 (    )
  8. 同志社女子大学での大学生活全般を通じて、あなたの満足度は次のどれにあてはまりますか。  
1. たいへん満足した    2. やや満足した    3. 何とも言えない    4. やや不満な点があった    5. 不満足であった
  9. 共学の大学が主流となっていくなかで、あなたは女子大学が必要だと思いますか。  
1. 必要である    2. ある程度必要である    3. どちらともいえない    4. あまり必要ではない    5. 必要ではない
- ☆質問9で選択肢1・2を選ばれた方にお聞きします。女子大学が必要だと思う理由を書いて下さい。  
(    )



☆質問9で選択肢4・5を選ばれた方にお聞きします。必要でないと思う理由を書いて下さい。

( )

10. 同志社女子大学の建学の精神のうち、覚えておられるものを次から選んでください。(複数選択可)

1. キリスト教の人間観にもとづいた教育を行う。
2. 女性の人格を尊重し、自立した人間として豊かな人生を過ごせる教養を身につける。
3. 社会に貢献しようとする意志を持った女性を育てる。
4. 建学の精神については、ほとんど覚えていない。

11. 建学の精神を知っている・知らないにかかわらず、学生間、教職員間に建学の精神について理解を深める機会を増やすことは、どの程度必要とお考えですか。

1. とても必要である
2. やや必要である
3. 何ともいえない
4. あまり必要でない
5. 全く必要でない

12. 同志社女子大学の教育理念のうち、覚えておられるものを次から選んでください。(複数選択可)

1. キリスト教に基づく他者への愛を大切にす「良心」を育む。
2. 一人ひとりが個性や能力をのばせるように「自主・自立の精神」を尊重する。
3. 専門分野にかたよらず幅広い分野の学問を修め、豊かな教養と幅広い視野を身につける。
4. 本学誕生の由来ともかかわる国際的な視点・考え方を育む。
5. 教育理念についてはほとんど覚えていない。

13. 教育理念を学生間、教職員間に徹底させることは、どの程度必要とお考えですか。

1. とても必要である
2. やや必要である
3. 何ともいえない
4. あまり必要でない
5. 全く必要でない

14. 同志社女子大学はどのような学生を育てることが求められていると思いますか。

あなたが優先すべきだと思われるものを書いてください。

( )

☆あなたは次のような事柄について、どのようにお考えですか。

15. から 20. の質問のお答に当てはまるものを 1～5 の中から選んでお書きください。

- |            |         |             |              |             |
|------------|---------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 2. そう思う | 3. なんとも言えない | 4. あまりそう思わない | 5. 全くそう思わない |
|------------|---------|-------------|--------------|-------------|

15. 小学校では、男子生徒と平等に扱われた。( )

16. 中学校では、男子生徒と平等に扱われた。( )

17. 高等学校では、男子生徒と平等に扱われた。( )

18. 家庭においては、性差に関係なくつけられた。( )

19. 性差に関する固定観念は、学校においても植えつけられてしまう。( )

20. 学校ではジェンダー・フリーな(性差に偏りのない)教育をすすめるべきである。( )

☆ 大学卒業後のあなたの就業形態と、その理由についてお尋ねします。

21. あなたは大学卒業後(進学・留学等をした場合はその後)、どのような形で就業されましたか。

1. フルタイム(アルバイト等を経た場合も含む) ⇒質問22. へ
2. パート・アルバイト …………… ⇒質問22. へ
3. 家業に従事 …………… ⇒質問22. へ
4. 就業しなかった …………… ⇒質問26. へ

22. 卒業後、中断せず継続的に何らかの形でお仕事を続けておられますか。

1. はい (定年退職を含む) ……………⇒質問23.へ
2. いいえ (退職や一時期中断後再就業を含む) ⇒質問24.へ

23. 質問 22.で、1. はい を選ばれた方にお尋ねします。

(1) あなたがずっと働き続けている／いたのはどのような理由からですか。次から3つ選んでください。

(定年退職された方は以下の答を過去形でお考え下さい。)

1. 生計を維持するために働く必要があるから。
2. 仕事にやりがいを感じられるから。
3. 働いて生活に経済的な余裕がもてるから。
4. 自分の能力や資格を仕事で生かし続けたいから。
5. 就職してからまだ数年しかたっていない。
6. 社会人として、働くのが当然だと思うから。
7. この仕事をやめると、再就職できたとしても労働条件が今より悪くなると思うから。
8. 社会とのかかわりをずっと持っていたいから。
9. 家業のため仕事をやめるわけにはいかないから。
10. 家にいるよりも、外に出て働くほうが自分に向いているから。
11. その他( )

(2) あなたが今まで仕事を続けてこられる上で必要だったと思われることはどういうことですか。

次から4つ選んでください。

1. 自分の残業や休日出勤が少ないこと。
2. 家庭のことを、十分にしようと思わないこと。
3. 夫の残業や休日出勤が少ないこと。
4. 夫や子どもと家事、育児を分担すること。
5. 女性が働き続けることに対して偏見を持たない職場であること。
6. 通勤時間が短いこと。
7. 夫や家族が働き続けることに賛同していること。
8. いわゆる「手に職」を持っていること。
9. 男女が平等であるという意識を持っていること。
10. 保育所が近い、両親の助けがあるなど、保育環境が整っていること。
11. 結婚、出産後も長く働き続ける女性が多く、そうした先輩を手本にすること。
12. 産休・育休・育児時間などを取得しやすい職場環境であること。
13. 男性以上に仕事に対して厳しく頑張り、成果をあげること。
14. 職場における女性の権利を獲得することに前向きであること。
15. 男女関わりなく、能力と貢献度で正しく評価される職場であること。
16. 仕事は仕事と割り切って、あまり力を入れすぎないこと。
17. その他( )

(3) 結婚や育児を機に就業形態に変化がありましたか。

1. フルタイム→アルバイト・パートタイム
2. オフィス勤務→在宅勤務
3. 転職した
4. フリーで仕事をするようになった
5. フルタイムのまま仕事を続けた
6. アルバイト・パートのまま仕事を続けた
7. アルバイト・パート→フルタイム
8. その他( )

24. 質問 22.で、2. いいえ を選ばれた方にお尋ねします。

(1) 仕事をやめた、または中断されたのはなぜですか。(最も大きな転機となった場合でお答えください。)

1. 留学や進学をしたから⇒(2)へ
2. 結婚したから⇒(3)へ
3. 育児のため⇒(4)へ
4. 介護のため⇒(5)へ
5. 夫が転勤したから
6. その他( )

(2) 留学や進学をされたのはなぜですか。

1. 仕事の上でキャリアアップしたかったから。
2. 技術や資格を取りたかったから。
3. 新しく勉強したい分野ができたから。
4. 生き方を見直してみたかったから。
5. その他( )

(3) 結婚を機に仕事をやめた、または中断されたのはなぜですか。

1. 外に出て働くより、自分には家庭にいてできることの方が多かった。
2. 家庭作りを優先したかった。
3. あまり何も考えず、結婚したらやめるものと思ってやめた。
4. 夫の家業を手伝う必要があった。
5. その時の仕事に魅力を感じなくなっていた時期が重なった。
6. 結婚後も働きつづけたと思うほどの仕事ではなかった。
7. 夫の勤務地が遠かった。
8. 結婚した女性はやめなければならないという職場の雰囲気だった。
9. 仕事と家庭の両立の為に、精神的肉体的にあくせくするような生活をしたくなかった。
10. 妻は働かずに家にいることを夫や家族が望んだ。
11. 働かなくても、夫の収入で暮らしていった。
12. その他( )

(4) 子育てのために仕事をやめた、または中断されたのはなぜですか。

1. 家庭作りを優先したかった。
2. 子育てを楽しみたかった。
3. 働かなくても、夫の収入で暮らしていけるめどがたった。
4. 外に出て働くより、自分には家庭にいてできることの方が多かった。
5. 子どもには母親が家にいてやるのが大切だと思った。
6. 母親は働かずに家にいて育児に専念することを夫や家族が望んだ。
7. 女性は出産したらやめなければならないという職場の雰囲気だった。
8. 育児と仕事を両立させるには時間的、体力的に難しかった。
9. 仕事と家庭の両立の為に、精神的肉体的にあくせくするような生活をしたくなかった。
10. 近くに保育所や親が存在せず、仕事と育児を両立できる環境になかった。
11. あまり何も考えず、子どもができたらやめるものと思ってやめた。
12. その時の仕事に魅力を感じなくなっていた時期が重なった。
13. その他( )

(5) 介護のために仕事をやめた、または中断されたのはなぜですか。

1. 夫の協力はあったが、介護と仕事を両立させるには負担が大きすぎた。
2. 夫の仕事を考えると、介護のための協力を期待することができなかった。
3. 介護は女性の役目という雰囲気が家庭内にあった。
4. 自分の親の介護だから。
5. 自分の中での仕事のやめ時とちょうど重なった。
6. その他( )

(6) 仕事をやめたあと、再度何らかの形で就業されましたか。

1. はい
2. いいえ

☆再就業された方にお尋ねします。

25. (1) あなたが再就業されたのはどのような理由からですか。次から3つ選んでください。

1. 生計を維持するために働く必要が生じたから。
2. やりがいのある仕事が見つかったから。
3. 自分の自由になる経済力を手に入れたかったから。
4. 家計に経済的な余裕をもちたかったから。
5. 自分の能力や資格を仕事で生かしたいから。
6. 社会人として、働くのが当然だと思うから。
7. 家にいるよりも、外に出て働くほうが自分に向いているから。
8. 子育てや介護が一段落して、時間に余裕ができたから。
9. 家業を手伝う必要が生じたから。
10. 社会とのかかわりを持ちたいと思ったから。
11. その他( )

(2)どのような形で再就業されましたか。

1. フルタイム    2. パート・アルバイト    3. 在宅ワーク    4. 家業に従事    5. その他(            )

(3)あなたが(2)の就業形態を選ばれたのはなぜですか。

1. 時間的に融通がきくから。    2. 夫の扶養控除の枠を越えたくないから。    3. 十分な収入を得たいから。  
4. 家事や育児と両立したいから。    5. 安定して働きたいから。    6. その他(            )

26. 大学卒業後、就業されなかった方にお尋ねします。あなたが仕事につかなかったのはなぜですか。

1. つきたい仕事になかったから。    2. 趣味や勉強など、やりたいことがあったから。  
3. 家事を手伝う必要があったから。    4. 結婚したから。(することになっていたから)  
5. 親から、就職する必要はないと言われたから。    6. その他(            )

27. あなたに娘さんがおられると仮定した場合、娘さんにはどのような働き方をして欲しいと思われますか。

1. 結婚と同時に仕事を辞める。    2. 出産と同時に仕事を辞める。  
3. 結婚・出産を経ても仕事を続ける。    4. 特に仕事をする必要がない。  
5. 子どもが小さいうちは育児に専念し、手を離れたら再就職する。    6. その他(            )

☆あなたは次のような内容について、どのようにお考えですか。

28. から 43. の質問のお答に当てはまるものを1～5の中から選んでお書きください。

1. 賛成    2. どちらかといえば賛成    3. どちらとも言えない    4. どちらかといえば反対    5. 反対

28. 女性は経済的に必要がなければ無理してまで職業を持たないでよい。(            )  
29. 子どもを保育施設に預けられれば母親も職業を持った方がよい。(            )  
30. 女性も、結婚後も職業を持って経済的に自立するほうがよい。(            )  
31. 女性は主婦専業でも家事労働をしているので経済的に自立しているのと同じだ。(            )  
32. 子どもが小さいうちは少なくとも3歳までは母親が育児に専念するべきだ。(            )  
33. 共働きの家庭では、家事は夫と妻が同じ位分担してやるのがよい。(            )  
34. 夫婦別姓は法的に認められるべきである。(            )  
35. 介護は女性の役割である。(            )  
36. 女性は結婚しなくても充実した生活を送ることができる。(            )  
37. 女性は子どもを持たなくても充実した人生を送ることができる。(            )  
38. 母親の評価は子育ての評価によって決まる。(            )  
39. 女性は子育てを通じて自己実現ができる。(            )  
40. 男性も育児休業を積極的にとれるような社会環境をつくるのが望ましい。(            )  
41. 社会の中に男女不平等な点があれば女性が行動を起こすべきである。(            )  
42. 社会の中に男女不平等な点があれば男性の意識を改革することが必要である。(            )  
43. 現在、日本の社会は全体として男女平等な社会である。(            )

☆あなたは次の内容について、どの程度ご存知ですか。

44. から 49. 質問のお答に当てはまるものを1～3の中から選んでお書きください。

1. よく知っている    2. 少し知っている    3. 知らない

44. 男女共同参画社会(            )    45. 男女共同参画社会基本法(            )  
46. 育児・介護休業制度(            )    47. 男女雇用機会均等法(            )

48. 女子差別撤廃条約( ) 49. 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律( )
50. あなたは卒業後、ご両親(配偶者またはパートナーのご両親)からどのような協力・支援を受けたとお思いですか。次から選んでください。(複数選択可)
1. 自分または子どもの教育費 2. 子どもの世話 3. 不動産取得 4. 家業継続  
5. 会社設立 6. 自分または家族の就職 7. 食料品、物品 8. その他( )
51. 卒業後今までの人生で、どのような困難や荒波をお感じになりましたか。  
次の中からあてはまるものすべてを選んで下さい。
1. 子どもの育て方 2. 子どもの不登校 3. 子どものいじめ問題 4. 子どもの家庭内暴力  
5. 夫からの暴力 6. アルコール依存症 7. 夫の異性関係 8. 自分自身の異性関係  
9. セクハラ 10. 家庭と仕事の両立 11. 離婚 12. 父母との関係 13. 舅・姑との関係  
14. 経済的な問題(リストラや倒産等) 15. 自分や家族の健康上の問題 16. 特になし 17. その他( )
52. あなたの卒業年度と学部、学科を書いてください。西暦\_\_\_\_年\_\_\_\_学部\_\_\_\_学科
53. あなたの年齢をお知らせください。( )才
54. あなたには現在、配偶者またはパートナーがおられますか。  
1. いる 2. いない
55. (1と答えた方へ)配偶者またはパートナーの方の最終学校は以下のうちどれですか。  
1. 高校 2. 短大・高専 3. 大学 4. 大学院 5. その他( )
56. 配偶者またはパートナーの方の職種は次のどれに該当しますか。  
1. 会社員・団体職員 2. 公務員 3. 自営業 4. 家業 5. 無職  
6. パート・アルバイト 7. その他( )
57. 配偶者またはパートナーの方はご出身家庭において、次のどれに該当しますか。  
1. 長男 2. 次男 3. 三男 4. 四男 5. その他( )
58. あなたを含めて何人家族ですか。( )人
59. あなたにお子さんは何人いらっしゃいますか。( )人  
☆一番上のお子さん、一番末のお子さんはそれぞれ何才ですか。一番上( )才 一番末( )才
60. ご両親(配偶者またはパートナーのご両親)と同居しておられますか。  
1. はい 2. いいえ 3. 同居はしていないが近距離の所に住んでいる 4. すでに他界している
- 追加質問 ☆フルタイム、パート、アルバイト、派遣、一時的なものにかかわらず、就業経験のある方にお尋ねします。  
(複数ある場合は、最も最近のものでお答えください。)
61. あなたの勤務先の産業を、次からお選びください。  
1. 建設 2. 製造業 3. 運輸・通信・情報 4. 卸売・小売業・飲食業 5. 金融・保険  
6. 教育サービス 7. 公務 8. 医療 9. 福祉 10. その他( )
62. あなたが働いておられる/おられた部門を次からお選びください。  
1. 人事・労務 2. 総務・広報 3. 経理・財務 4. 情報処理 5. 製造・技術・設計  
6. 研究開発 7. 企画・調査 8. 法務 9. 営業・販売 10. 教員 11. その他( )

-----  
アンケートは以上です。ご多忙の折にもかかわらず、ご協力いただきましてありがとうございました。